

NEXT ONE！これからの臨床検査と臨床検査技師への期待

◎前川 真人¹⁾浜松医科大学 医学部 臨床検査医学 教授¹⁾

2020年に始まったコロナ禍は、感染力は強いが病原性は弱くなったというオミクロン株一色になり、新患者が減少傾向にあるが、いつ終息（or 収束）するかは不明である。一方、日本は今後、総人口は減少の一途をたどり、65歳以上の高齢化人口が30%を超え、寿命は延伸することで、医療費や介護費、社会保障にかかる費用は増大していく。そして、健康志向とも相まって医療も健診も臨床検査も、その需要は増加する。技術が進歩し、新しい検査法、検査項目なども開発され、自動化やロボット化は進み、人工知能（Artificial Intelligence; AI）が活用され、医療関連業務の効率は格段に向上していく。付加価値とされる情報提供も増大するだろう。また、ワイヤレスでスマートフォンなどを用いた日々リアルタイムで得られる生体情報の収集から、医療機関で行われる検査（検体、画像）などを使い分けることで診断体系も変革され、検査の裾野も広がることが予測される。とはいえ、基本的な臨床検査の姿勢は普遍である。すなわち、精確な検査結果を報告することが基本である。

さて、今回の支部シンポジウムのテーマは「夢を語ろう ～NEXT ONE」 次の“検査室に向けて”であり、ねらいには4つのキーワードが記載されている。すなわち、職域の拡大、業務の効率化、品質保証、人材育成である。いずれも重要なキーワードであるので、この4つの観点で少し述べたいと思う。

職域の拡大に関しては、業務のボーダーレス化が進むと思われる。すなわち、法的に行える作業が増えることによって、同じ作業を複数の職種が担当できるようになる。例えば、薬剤には副作用がつきものであり、各種症状に伴い検査結果にも影響を与える。検査結果が読める臨床検査技師は、薬剤情報 AI を活用することで、検査結果の異常が病態から来るものか、薬剤による干渉なのかを明らかにできるようになると、医師および患者にとって有用な情報提供になると考えられる。

業務の効率化として、自動化とロボット化は検査過誤の削減にもつながる。また、AI によるサポートで業務配分、検査結果への影響、検査結果の判読などで効率化が図れる。ただし、レディメイドではなくテイラーメイド、自分たちでの開発やチューニングを行えるように知識を高めておいてもらいたい。

品質保証は改正医療法によって義務づけられたが、そもそも臨床検査の基本である。状況によっては検査依頼も含めた分析前プロセスから、分析プロセス、そして結果報告（付加価値としての情報提供も含めた）の分析後プロセスまで、全てのプロセスを、責任を持って管理してもらいたい。工業製品のように同じ品質のものであれば安い方がよいのだろうが、臨床検査は工業製品とは違うことは皆さんが一番よく知っているはずである。同じ機器試薬で分析したとしても同じ結果が得られる保証はない。まして全検査プロセスとして考えると、同じ品質を常に得るにはそれなりの体制と努力が必要である。ならば、安かろう悪かろうとなる危険性が高い。品質保証のレベルによる加算が求められる所以である。

人材育成はシステム構築が重要である。そして、教える側の育てる気持ちと教わる側の育つ気持ちの相乗効果が求められる。臨床検査技師として、全員が一生勉強、一生向上と前向きな精神で進んでほしい。

自分の責務を理解し、他の医療関係者や患者と協力しつつ、臨床検査のプロとしての自覚を持ち、最善の臨床検査・医療を届けられるよう、皆で前を向いて進んでほしいと願い、さらなる多分野での活躍を期待している。